

Title	大久保狭南の生涯：小金井桜樹碑の建立の背景
Sub Title	The life of Okubo Kyonan : the background to the erection of the Koganei Cherry Blossom Commemorative Monument
Author	浅井, 万優(Asai, Mayu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.128, (2025. 6) ,p.18 (143)- 34 (127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01280001-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大久保狹南の生涯

——小金井桜樹碑の建立の背景——

浅井 万優

はじめに

大久保狹南、名は忠休、号は狹南・名齋、字は明夫。元文二年（一七三七）、武蔵国多摩郡清水村に生まれ、文化六年（一八〇九）十二月二十一日に亡くなった。品川の東海寺真珠院に葬られる。¹ 狹南は、清水村にかつて存在した本山派の修験寺院である持宝院の家系に生まれ、第十二代柳光の弟にあたる。²

狹南の生涯を見渡したとき、最も注目されるのが、武蔵野に関する著作の出版である。例えば、武蔵野を訪れて風光明媚な地を八景に選び、師友による詩文を集載した『武野八景』（寛政九年（一七九七）刊）や、和文による八景の案内書『仮名略文 むさしの八景』（文化五年刊）等が特筆される。なお、武蔵野を中心に据えた地誌は、これより以前には僅かであった。例えば、田沢義章『武蔵野地名考』（享保二十一年（一七三六）刊）が挙げられるが、地名の考証に終始している。³ すなわち、武蔵野の実情を伝える書物として、狹南の著作は画期となるのである。

このように、狹南は武蔵野を世に紹介、宣伝した人物として著名であるが、その集大成とも言うべき事業が小金井桜樹碑

文の製作である。文化七年に建てられたこの碑は、玉川上水に植樹された桜の効用や美観を讃えている。すでに多くの論考がある小金井桜樹碑について、付け加えるべきことは少ないように思われる。しかし、狭南の生涯と、碑建立の背後にある狭南のネットワークについては、依然として十分な考究がなされていない。本稿では、狭南の文事や人物関係を精査することによって、小金井桜樹碑の建立や、碑文の製作をどのように評価し直すことができるかについて考えてゆく。

一、大久保狭南の事績

まずは、狭南の生涯について、自身の詩文集である『狭南集』（文化二年（一八〇五）序刊）を始めとする著作などから、可能な範囲で辿りたい。もともと、正確な年次については明らかにし得ない部分も多い。

青年時代までの事績については、はっきりしたことは分からない。僅かに見出せる手掛かりとして、中根東平が『狭南集』に寄せた序文の一節「自少罷宦、不復出仕（少きより宦を罷め、復た出でて仕へず）」（『狭南集序』）によって、狭南が若くして官を辞したことが明らかになる。また、狭南自身の回想「往歳余辞宦、暫帰郷里也（往歳余宦を辞して、暫く郷里に帰るなり）」（『武野八景序』）から、辞職した後、郷里の清水村で暮らしていたことが窺える。

正確な時期は不明であるが、狭南は深川に居を構え、大内熊耳の下で学んでいた。当時の狭南の人となりについて、大内門下の中根東平は、「恢達善譚。先生亦以是称焉（恢達善く譚ず。先生亦た是を以て称す）」（『狭南集序』）つまり、心が広く朗らかで、よく喋る人であり、大内もこの点を称賛していたという。狭南の学問の様相については、奥医者おくいしやの杉浦安定さねやすが次のように述べている。「此時同社之人、皆根拠於李王、而為世所謂古文辞者。独明夫刻意於韓柳（此の時同社の人、皆李王に根拠して、世の所謂古文辞なる者を為す。独り明夫の心意を韓柳に刻す）」すなわち、門人の多くが古文辞学を標榜し、李攀龍や王世貞に学ぶ中、狭南は、ひとり韓愈や柳宗元を学んでいたという。狭南は、大内熊耳のほかに、宇佐美瀧水や服部仲英なかつにも師事していた。

このように、徂徠学派の師の下で詩文の学習に励む傍ら、自らも私塾を開いて教育を行っていた。当時の状況を、狭南

は、以下のように述べている。「有夫妻子母之属、幸得不廢大倫、以無生産供朝夕、窮乏益甚矣。故今下帷招徒者、非好為人師（夫妻子母の属なひ有りて、幸ひに大倫を廢せざるを得たれども、生産の朝夕に供する無きを以て、窮乏益ます甚だし。故に今帷を下して徒を招くは、好んで人の師たるに非ず）」（『報馬子衛』『狭南集』卷四）狭南は、家族に恵まれて、学問を続けることができる一方で、日々の食事に困るほど貧しく、私塾を開いているが決して師となりたかつたわけではない、と述べている。このとき、狭南は、再度仕官することがかなわず、妻子を抱えて貧困に直面していた。

狭南が四十代に差し掛かるころ、再び官途へ就くべく、これまで住んでいた深川から、芝の三田台へ居を移すこととなった。このときの心情を詠んだ詩がある。「除夜作」と題し、題の下に「是歳為求仕移居芝南、待命於早春（是の歳仕を求む為め居を芝南に移し、命を早春に待つ）」と注されている。詩の読解は注に譲るが、早春に仕官の命が下るのを待ちわびる気持ち¹²が詠われている。しかし、結局官を得ることはかなわなかった。以降、芝の私塾に子弟を集め、教授していたと考えられる。

狭南は、寛政三年（一七九二）夏、三田台の自宅とは別に、聖坂下に書齋を築いて「名齋」と名付けた（『名齋説』『狭南集』卷三）。潮見坂に面しており、ここからは、芝の町並みと海を一望することができたという。しばしば友人を招いて、詩会を催すなど、騷人墨客の集まる場所にしたいと願望を述べている。実際に、『狭南集』には、芝に住む文人や、芝の屋敷に生活する大名らと唱和した詩文が多数収録されている。

寛政七年には、娘婿の石永貞を連れて、郷里の清水村（現在の東京都東大和市清水）周辺を散策しに出掛けた。この頃から、狭南は、武蔵野の顕彰・宣伝活動に力を注ぐようになる。最も顕著な活動が、寛政九年の『武野八景』の出版で、石永貞と共に武蔵野の景勝地を八つ選定し、師や友人から詩書画を募って、詩文集を製作した。『武野八景』の出版については、西内友美「『武野八景』考」¹³に詳細に論じられている。

文化年間に入ると、文筆活動にさらに邁進してゆく。文化二年には、自身の著作を門人が整理した『狭南集』が出版された。翌年の文化三年には、東晋時代の永和九年（三五三）の曲水の宴で詠まれた詩を集めた『蘭亭群賢詩』が出版される。

文事を介した人々との交流はなおも続いており、文化三年に狹南の七十歳の賀会が催され、海量¹⁴や陰山雍¹⁵らが詩を寄せた。文化六年十二月二十一日、七十三歳にて亡くなった。品川東海寺真珠院に葬られた。

ここまで、狹南の生涯を『狹南集』を始めとするいくつかの著作によって描出した。狹南の文章には、年次が記されるものが極めて少なく、とくに若年期については明らかにし得ない部分も多い。こうした狹南の事績について、これまでの研究では『寛政重修諸家譜』巻七十一「大久保忠休」項に基づいて記述する例も見られるが、『寛政重修諸家譜』の記述には、いくつかの不審な点がある。例えば、宝暦五年（一七五五）に二十五歳で家督を継いだとあるが、先述のように、狹南には兄柳光がおり、この兄が持宝院を継いでいる。また、このときの狹南の年齢は、墓碑に刻まれた没年と享年から計算すると、十九歳となる。西内友美氏も、『寛政重修諸家譜』によれば寛政八年に西丸に伺候したとあるが、『武野八景』寛政九年の序文には既に職を辞したとあり時期が合わず、疑問が残る」と述べている。

二、小金井桜樹碑建立の協力者

以上のように、不明な部分もなお多く残る狹南の事蹟であるが、晩年に情熱を傾けたのが、小金井桜樹碑建立を中心とする故郷の武蔵野の顕彰であった。まずは、小金井桜樹碑の概要を述べる。碑が建てられた経緯や、碑文の内容について、『小平市史 近世編』中の「文化七年の建碑事業」¹⁶に詳述されている。ここでは、「文化七年の建碑事業」に拠りつつ、あらためてその概要を確認しよう。

碑文が製作された時期は、狹南の最晩年にあたる文化六年頃である。建立の経緯については、石永貞「大久保狹南先生墓陰記」の中に、「曾有建此碑之宿志、而文未及脱稿、以文化六己巳年、十一月廿一日病没。時年七十三也。於是石永貞、加藤景範、上條游等、与先生社中堤喜之、黨董和諸人計、以稿刻石、聊果其志耳。豈文化八年辛未年春二月（曾て此の碑を建てんとするの宿志有りて、文未だ稿を脱するに及ばずして、文化六己巳年、十一月廿一日を以て病没す。時に年七十三なり。是に於て石永貞、加藤景範、上條游等、先生の社中堤喜之、黨董和諸人と計りて、稿を以て石に刻し、聊か其の志を果たすのみ。豈文化八年辛未年春二月）」と記されている。狹南は、小金井桜樹碑の建立を宿願としていたが、志を遂げるこ

となく文化六年に病で亡くなった。そこで、親戚や門人らが相談し、碑文を石に刻したという。

こうした一連の活動において、彼を支えたのが、江戸と武蔵野、すなわち彼が生涯の大半を過ごした地と故郷の人々であった。小金井桜樹碑の裏面に刻まれている名前を見ると、誰が関わっていたのかが明らかにになる。

芝村侯

江戸

山梁亭堤好之

雪月居黛路哉

月中庵川上秋槎

品川

心海寺

巴屋六太郎

長谷川正輔子方

押立村

川崎平左衛門

鈴木新田

定右衛門

山口

金乗院

宅部

石井勘左衛門

田口弥三郎

宮鍋仙治郎

清水

五十嵐清左衛門

大久保掃部

梅窩石永貞子亭

涌井半兵衛直賢

代耕堂加藤景範希賢

犀淵上條游子芸¹⁷

碑に刻される人物は、「江戸」や「品川」といった江戸やその付近に住む人々と、押立村、鈴木新田、山口、宅部、清水のように武蔵野に住む人々とに大別される。これらの人物について、すでに「文化七年の建碑事業」に、「金橋桜花」周辺の地域住民と江戸の文人らとの文化的ネットワークによるもの」（四九五頁）と概括されているが、あらためてそれぞれの人物を取り上げて、狭南の交友関係を確認してゆく。

三、狭南と江戸の人々

最初にその名が見える芝村侯は、大和国芝村七代藩主の織田輔宣^{すけよし}である。芝村藩の下屋敷が芝白金台にあったことから、聖坂に居を構える狭南とは親しい交流があった。例を挙げると、輔宣が領地の芝村へ帰る際に詩を送ったり（「奉送芝村侯帰封」『狭南集』巻二）、輔宣の古稀に際して詩を寄せたりしている（「芝村老候七十初度今侯有賀詩賜覽因賦奉寿」『狭南集』巻二）。輔宣の没後に、墓誌を撰したのも狭南であった（「芝村瑞公墓誌」『狭南集』巻三）。

次に見えるのは、「江戸」という括りに分類される、山梁亭堤好之、雪月居黛路哉、月中庵川上秋槎である。彼らのうち、月中庵川上秋槎については、素性を明らかにし得ないが、山梁亭堤好之および雪月居黛路哉は、いずれも三田に住む狭南の門人であり、その中でも中心的な位置を占めていたと考えられる。¹⁹以下、二人について詳しく見てゆこう。

まずは、堤好之について、名は弥三郎、字は好之・喜之、号は百合舍、山梁亭は俳号。和歌や俳諧に関心があったと見

え、歌人で国学者の清水浜臣と交流があった。浜臣は、好之の母の歌集である『は、その落葉』（文政三年（一八二〇）跋刊）に序文を寄せている。好之は、豊田屋という屋号を持つ商人でもある。天明八年（一七八八）に勘定所御用達に任命され、文化十年に御用金三千兩を納めるなど、莫大な財産を持っていた。²⁰ こうした資金力をもって、小金井桜樹碑の建立を援助していたのであろう。次に、雪月居黛路哉について、路哉は字か。名は伝八、号は下蔭。好之と同様、三田に居を構え、²¹ 清水浜臣と交流があり、和歌や俳諧をよくした。堤好之と黛下蔭は、箱根の芦之湯に賀茂真淵の二児山歌碑を建立する際にも、力を貸したことが知られている。²²

以上の二人に加えて、碑の末尾に見える梅窩石永貞子亭、代耕堂加藤景範希賢は、狭南と親戚であった。石永貞について、字は子亭、名は文之進、号は梅窩・清瘦園。狭南の娘婿であり、『武野八景』において狭南と八景を選定したほか、寛政七年（一七九五）に狭南と武蔵野を訪れた際には『武野遊草』を記している。²³ 同じく狭南の娘婿である加藤景範は、字は希賢。石永貞と共に『狭南集』の出版に尽力し、跋文を寄せている。なお、大坂の歌人に同姓同名の人物がいるが、こちらは字が子常、号が竹里であり、寛政八年に没していることから、同一人物ではない。

この他にも、碑の末尾に見える犀淵上條游子芸は、名は遊または勇蔵、号は犀淵・雲樵山人、字は子芸。画家であり、書もよくした。²⁴ 狭南との生前の関わりは不明であるが、小金井桜樹碑建立の際には書を草している。涌井半兵衛直賢については未詳である。

なお、堤好之、黛下蔭、川上秋槎、石永貞、加藤景範、上條游は、『遺愛花』（文化八年序刊）に狭南の小金井桜樹頭彰の功績を讃えた漢詩や和歌を寄せている。いずれの人物も武蔵野の地に縁はないが、狭南の遺徳によって紐帯が結ばれたのである。

四、狭南と武蔵野の人々

これら江戸の人々が名を連ねる一方で、小金井の人物として、押立村の名主である川崎平左衛門と、鈴木新田の名主であ

る定右衛門の名が見える。鈴木新田の定右衛門は、同じく鈴木新田の海岸寺と連名で、石永貞から金一両を寄付金として受け取っている（文化七年三月「碑文石建立入用金子御寄附請取覚」²⁵）。

狹南の郷里の人物の名も見える。宅部の石井勘左衛門は武蔵国多摩郡後カ谷村（現在の東京都東大和市狹山）の名主である。同じく宅部の宮鍋仙治郎は同郡高木村の名主であり、清水の五十嵐清左衛門は同郡清水村の名主である。大久保掃部は、持宝院に奉職する狹南の親戚であろう。このうち、石井勘左衛門、五十嵐清左衛門、大久保掃部については、狹南との具体的な交流の記録が残っている。石永貞が記した『武野遊草』の中に、狹南や石永貞と共に清水村の付近を散策したことが記されている。

宅部の田口弥三郎は、狹南の手になる碑文「武州廻田宅部石橋碑」（『狹南集』巻三）により、狹南との交流の実態が分かる人物である。この碑は、狹南の郷里清水村に隣接する、宅部村の石橋について述べたものである。石橋と田口弥三郎の逸話を述べた部分を次に示す。

（前略）武州多摩郡、廻田宅部、邸中橋多、更相折壊。繕修無息時、或霖雨水溢、則俄頃都流亡、間亦有之。民以爲患。邸人田口弥三郎匡明、欲代木以石、長除患久矣。先是九年、男女娶嫁既畢、退斷家事、結廬道側、以賈爲業。行客經過、富豪委輸、時有奇羨、猶患衣食、務致蓄藏、以充其費。又且求隣里施者、助不給。以寛政八年丙辰、皆既成。惣計十有五。（後略）

（武州多摩郡、廻田宅部、邸中橋多く、更^こも相ひ折壊す。繕修息^やむ時無く、或いは霖雨^{いんう}（筆者注…長雨のこと）水溢するときは、則ち俄頃^{がけい}に都て流亡^{すべ}するも、間^まも亦た之れ有り。民以て患^{うれ}ひと爲す。邸人田口弥三郎匡明、木に代ふるに石を以てし、長^{とこし}へに患^{うれ}ひを除かんと欲するや久し。是より先九年、男女娶嫁^{しゅか}既に畢^{おほ}り、退きて家事を斷ち、廬を道側に結び、賈を以て業と爲す。行客の經過、富豪の委輸、時に奇羨有るも、猶ほ衣食を惡み、務めて蓄藏を致して、以て其の費に充つ。又た且つ隣里の施す者を求めて、不給を助く。寛政八年丙辰を以て、皆な既に成る。惣計十有五なり。）

狹南は、石橋が造立された経緯について、宅部村の橋は、川が増水すると流失し、村民を悩ませていたこと、村人の田口弥三郎が橋の材を木から石に替え、村民の憂いを取り除こうと画策していたことを述べる。続けて、弥三郎の功績について、隠居後に商いを始め、格別の利益が出て粗末な衣食に甘んじ、散財せず貯蓄に励んだ結果、財を投じて十五本の石橋を架けたことを述べている。この文章の後に、私利に走らず、財をなげうって村に貢献した弥三郎を讃える銘が付される。

この田口弥三郎という人物については、金乗院の十八代住職亮盛と親交があり、文化二年に亮盛の遺志を継いで、狹山三十三観音霊場の案内書である『武蔵野狹山観音巡礼記』を出版する²⁶など、宅部村でも名の知れた存在であったと推察される。

以上に見た郷里の名士と狹南との親交は、狹南の生家である持宝院の影響力に依る所も大きいだろう。しかし、狹南は、若年期に故郷を離れ、一時期の帰郷を除いて、生涯の大半を江戸で過ごした。郷里を離れてもなお、土地の名士のもとを積極的に訪問していたことは、『武野遊草』に記される通りである。こうした活動によつて築かれた武蔵野における人脈もまた、狹南の文事を支えていたのである。

五、狹南と寺院とのつながり

以上、小金井桜樹碑をめぐる人的ネットワークを見てきたが、この碑とともに、狹南の武蔵野顕彰の事績である『武野八景』中の人物についても一言する。

狹南の文学活動は、寺社と密接な関わりの中で行われていた。すなわち、狹南は、僧侶らと親しく付き合い、彼らから碑文などを求められる機会も多かった。

諸宗派の中で、最も交流の足跡が露わであるのが、浄土宗の寺院である。彼は自身が住した深川や芝近辺で浄土宗の僧侶と親交を持つようになる。例えば、狹南が増上寺の僧侶に贈った文章「呈大僧正縁山堂公序」（『狹南集』卷三）によると、

増上寺のそばに仮寓し、学寮の学徒と日常的に交流していたという。²⁷

このほか、「送察上人住紀州大智寺」(『狭南集』巻二)では、百万遍知恩寺の五十世住職を務めた察岡について、故郷の紀州に大智山の住職として戻ることを説いている。また、「送仙鶴上人従導師大僧正之長安華頂山」(『狭南集』巻二)では、浄土宗の総本山、知恩院の山号が詠まれ、さらに、「送秀存上人住三州松応寺二首」(『狭南集』巻二)は、「祇廟前有瑞松(祇廟前に瑞松有り)」と注しており、浄土宗の能見山松応寺の家康手植えの松に言及している。

曹洞宗の僧とも交わりがあった。「賀田明師分座」(『狭南集』巻二)では、曹洞宗の分座について詳細な説明を注の形で施している。

寺社との接点で、とくに注目すべきは、今日も浅草に残る浄土宗の榎寺(池中山盈満院正覚寺と号した。榎寺は当時の俗称であった)であろう。すでに述べたとおり、狭南は浄土宗との密接な関わりを有していたが、とりわけ親しく付き合った浄土宗の僧侶に、高玄上人がいた。狭南の「高玄上人伝住二首并序」(『狭南集』巻二)によると、高玄は深川の靈巖寺で修行をした後、榎寺に移り、第十四世住職を務めたという。狭南も高玄も、若年期に深川に住み、互いの住居を訪ね合った。狭南が芝に、高玄が浅草に越した後も、高玄が亡くなるまで、三十年の長きにわたって交流が続いたという。高玄は、『武野八景』に八景詩を寄せているが、それはこのような縁によるものであった。

この榎寺と高玄・狭南との間には興味深いつながりが見える。例えば、榎寺の沿革を記した「榎寺縁起」はその一例である。この縁起について、山口剛氏の研究²⁸がある。氏によると、榎寺には、第四世住職の宅誉^{たくよ}が明暦三年(一六五七)に製作した「榎寺縁起宝符来由」が蔵されており、高玄がこれを用いて、寛政四年(一七九二)に「榎寺縁起」を製作したという。たしかに、内容が一致することから、高玄が「榎寺縁起宝符来由」を参照して、「榎寺縁起」が成ったことは確実である。

ただ、実は狭南にも「榎寺記」(『狭南集』巻三)という文章があり、その中には、高玄の「榎寺縁起」とほぼ同じ表現が散見される。例えば、狭南の文章において、「有一道士、体貌雄偉、来就求囲棋(一道士有り、体貌雄偉、来たり就きて囲

棋を求む」となっている箇所が、高玄の手になるものでは、「一道士、体貌雄偉、来就求囲棋（一道士、体貌雄偉、来たり就きて囲棋を求む）」と記されているのはその一例である。完全な一致でもなく、また先後関係について推定する資料がないため、論証は難しいが、あるいは、高玄の碑文の制作に際して、狭南の文章が参照されたこともあったのだろうか。

なお、先に見た小金井桜樹碑に刻まれた名の中にも、心海寺（浄土真宗）や金乗院（真言宗）のように、人物の他に寺院の名も見える。ただし、これらの寺院については、狭南が親しくした浄土宗や曹洞宗と宗派が異なっている。こちらについては、やはり土地の有力な寺社が名を連ねたと考えられよう。

六、小金井桜樹碑文の評価

このように、小金井桜樹碑建立のいきさつは、彼の生涯にわたる文学活動を見ることによって、よりよく理解することができる。それでは、碑文についてはどうか。

本文の分析に入る前に、碑文の内容を概観する。まず、文章の冒頭では、小金井桜樹の来歴が説かれる。元文二年（一七三七）³⁰に、鈴木新田の世話役である川崎平右衛門が、全国から桜を取り寄せ、玉川上水に植樹したことが述べられる。次に、桜の効用が列挙される。玉川上水の堤に根が張り、決壊を防ぐこと、春には行楽客の目を楽しませ、夏には木陰を作って日光を遮ること、桜の花が水毒を解くことなどが挙げられている。続いて、小金井が名所となってゆく過程が述べられる。具体的には、狭南が小金井を八景に定めたことで、訪問者が急増したことが述べられ、最後に、川崎平右衛門の功績を讃えた銘によって締めくくられる。

この碑文の特徴について、すでに先学によっていくつかの点が指摘されている。土屋忍氏は、碑文における桜花の表現が陶淵明「桃花源記」に拠っていることや、³¹狭南が桜の解毒作用に注目した点を特筆している。³²

ただ、おそらく小金井桜樹碑の最も重要な点は、小金井の桜が、江戸の水道を支える役割を果たしていると述べた点ではないだろうか。この部分について本文を示す。

吾東方医家、一二方函、桜筍及花、総用解毒剂、則水毒亦可解。況兩岸千樹相蔭映、直流径入東都、何毒之有。宜億兆爨炊之用、煎茶第一之水、所薦於鬼神、羞於公侯、誠忠用心、庶乎仁政一助哉。

（吾が東方の医家、一二の方函に、桜筍^{おうしょ}及び花を、総て解毒の剂に用ゆれば、則ち水毒も亦た解くべし。況や兩岸の千樹相ひ蔭映し、直流して径に東都に入れば、何の毒か之れ有らん。宜なり億兆爨炊^{みだち}の用、煎茶第一の水、鬼神に薦め、公侯に羞むる所、誠忠用心、仁政の一助に庶^{ちか}からん。）

この文章において、狭南は、日本の医者が著した一二の薬学書に載る事項として、桜の樹皮および桜の花を、解毒剂として用いることを挙げ、それならば水の毒も解毒され得ると述べている。また、兩岸の千樹の桜が互いに影を落とし合う様を描き、それらの花びらが流れてそのまま江戸に入れば、どんな毒も無くなると主張する。さらに、浄化された水の効用について、何億、何兆もの江戸の住人の炊飯や、煎茶にも最良の水であり、神々へも、将軍や大名へも勧めることができると言い、こうした忠義を尽くした心掛けが、仁政の一助になっていると述べている。

この箇所ですず着目すべきは、桜に解毒作用があるという点である。これについては、土屋忍氏がすでに注目しているが、その出典などは明らかにない。管見の及んだ範囲では、華岡青洲『瘍科方筌』（近世後期成立）に「桜筍敗毒散 治一切血毒熱腫」とあるが、この書は狭南没後に流布した書籍であり、直接の関係はないだろう。それ以前から和方書の中で唱えられていたと推測される。

ただ、ここより深く検討しなければならないのは、小金井の桜の有用性を、江戸の人々の生活を支えるという点から主張していることである。狭南は、玉川上水の解毒された水が江戸に流れ、数多の江戸の庶民の炊飯に供され、一級の煎茶に用いられるといい、このような水道の水を「所薦於鬼神、羞於公侯（鬼神に薦め、公侯に羞むる所）」³³すなわち、神々にお供えし、将軍や大名にもお勧めすることができると説いている。この文章には、自らの故郷である武蔵野が、江戸市民の生

活と、都市の繁栄を支えているという狭南の自負が表れているのである。

なお、武蔵野の河川と江戸の水道との関わりについては、狭南周辺の人物にも言及がある。例えば、川越藩の儒者である関松窓は、『武野八景』の序文において、次のように述べている。

武之野、史乗所載、歌詠所采、勝地名区、固不乏也。夫昇平之久、人民殷衆、壑藝黍稷、民徙居址。勢也、氓之蚩蚩、以為振古若斯。茫乎莫識古之所以得名、而独誇於玉川之水、能已東都尊賤億万之渴而已。

（武の野は、史乗の載する所、歌詠の采る所にして、勝地名区、固より乏しからざるなり。夫れ昇平の久しき、人民殷衆（筆者注…多く盛んなこと）、壑じて黍稷を藝え、民徙りて居址す。勢ひ、氓の蚩蚩たる（筆者注…おろかなさま）、以て古振り斯の若しと為す。茫乎として古の名を得たる所以を識る莫くして、独り玉川の水、能く東都尊賤億万の渴を已むるを誇るのみ。）

その意図は、武蔵野の古跡名所を忘れ、当今の殷賑にのみ目を向ける人々への警鐘である。松窓も、武蔵野の地と江戸の水道との関わりについて言及しているが、これは、当代の人々を批判するための材料に過ぎない。一方、小金井桜樹碑には、狭南独自の視点がある。狭南は、武蔵野の名所と江戸の生活とを緊密に結びつけながら、単なる美しい景色をもたらず場所以上に、江戸の繁栄を支える地として積極的に価値付けようとしているのである。

おわりに

狭南の生涯を見渡すと、多種多様な人物と交流を持ったことがわかる。具体的には、大内熊耳門下の徂徠学派の儒者や、深川在住時代に知り得た僧侶や文人、芝在住時代に交流した大名や商人、郷里の名士など、その幅は広い。狭南の文事は、こうした人的ネットワークによって成り立っているといえる。

小金井桜樹碑の建立もまた、様々な人脈が結集して行われた事業である。その大枠は、夙に指摘されているように、武蔵野の住民と江戸の文人とのネットワークであることに相違ないが、仔細に見てゆくと、狭南との関わりが鮮明に浮かび上がってくる。江戸には、狭南の居所である三田の地縁によって結ばれた文人ネットワークがあり、武蔵野には、狭南が郷里を訪ねて交流を深めた、村の名主らの連帯があった。

狭南は、武蔵野を郷里に持ち、江戸の都市に生きた人物である。このような背景をふまえて小金井桜樹碑文を読んだとき、その評価は自ずと異なってくるだろう。小金井の桜によって江戸の水道が成り立つという主張こそ、武蔵野を江戸の生活を支える地と捉える、狭南の自負が表れており、独自の視角として最も評価すべきである。

註

1 石永貞「大久保狭南先生墓陰記」（文化十二年（一八一五）成立）参照。墓碑が大日堂（現在の東京都東大和市清水）に現存する。本稿では、現存する墓碑および杉本林志『狭山之葉』（狭山之葉刊行会、一九三九年）四十七頁に載る翻刻を参照した。

2 杉本林志『狭山之葉』（同前）四十八頁。『狭山之葉』は、明治十五年（一八八二）に成立した杉本林志の手になる狭山丘陵一帯を扱った地誌である。

3 武蔵野の地誌における『武野八景』の位置づけについて、西内友美「『武野八景』考」（『成城人文研究』第一七号、二〇〇九年）に詳しい。武蔵野の地誌については、「近世の地誌」（武蔵野文化協会『武蔵野事典』雄山閣、二〇二〇年）四六四頁に詳しい。

4 中根東平 寛保元年（一七四一）生、文化二年（一八〇五）没。六十五歳。姓は初め宇賀氏、名は経世、字は君美、通称は覺太夫、号は東平。大内熊耳に学ぶ。信濃高遠藩で藩主の侍読を務めた。

5 大内熊耳 元禄一〇年（一六九七）生、安永五年（一七七六）没。八十歳。名は承祐、字は子綽、通称は忠太夫、熊耳は号である。荻生徂徠に学ぶ。肥前唐津藩の儒者。

杉浦安定 生没年未詳。名は玄徳、号は靖齋。大内熊耳に学ぶ。奥医者、医学館世話役を務めた。

服部仲英 正徳四年（一七一四）生、明和四年（一七六七）没。五十四歳。本姓は中西、名は元雄、通称は多門、号は白賁・踏海。服部南郭に学び、その婿養子となった。

「余少年従事熊耳先生、与藤明夫相見。明夫長於余十有餘歳、既下帷教授（余少年より熊耳先生に従事し、藤明夫と相ひ見る。明夫余に長ずること十有餘歳、既に帷を下して教授す）」（杉浦安定「狭南集序」）

「及不佞再東、憑藩有司通信音、一月三之不為難。而猶不得一書尋旧盟（不佞再び東するに及びて、藩の有司に憑きて信音を通ぜば、一月に之を三たびせしも難しと為さず。而れども猶ほ一書の旧盟を尋むることを得ず）」（「報馬子衛」『狭南集』卷四）

狭南が芝に移住した時期について、杉浦安定が文化二年に記した「狭南集序」の記述が参考になる。「既而明夫移居城南、路阻且遠。余亦以刀圭無暇、闕焉不往來者、三十餘年于茲矣（既にして明夫城南に移居し、路阻にして且つ遠し。余亦た刀圭（筆者注…医業）を以て暇無く、闕焉として往來せざること、茲に三十餘年なり）」

「自從散髮隱漁養、江左光陰幾度過。今夕一年雖復尽、此身双鬢未全皤。及時聊趣彈冠会、遭主将休扣角歌。誰笑旧遊高臥士、芝南小草俟春和（散髮して漁養に隠れしより、江左の光陰幾度か過ぐ。今夕一年復た尽くると雖も、此の身双鬢未だ全く皤ならず、時に及びて聊か趣く彈冠の会、主に遭ひて将に休まんとす扣角の歌、誰か笑はん旧遊高臥の士、芝南の小草春和を待つことを）」（「除夜作」『狭南集』卷二）

訳は次の通りである。「役人を辞して、深川にて隱遁の日々を過ごしてきた。また一年が過ぎようとしているが、まだ私のこめかみに白髪はない（まだ仕官するには遅くない）。いま、求職の機会を得ようと思う。良い君主に巡り会ったならば、歌に不満を託したりはしない。誰か笑う者がいるだろうが、かつて隱士として生きていた私は、今や芝南のつまらない小草となつて、春の陽氣を待ちわびているのだ。」

冒頭の「散髮」は、冠を脱いで髪がばらけること、転じて役人を辞すことを表す。「隱魚養」は隱者を暗示する漁夫の養に隠れることから、隱遁するの意。「江左」は、江戸城から見た隅田川の左岸、「彈冠」は冠を弾いて塵を落とすことから、官の招聘を待つこと。「高臥士」は、東山に隱棲した謝安の故事を踏まえる。「小草」も謝安の故事に由来する語。「世說新語補」「排調」に見え、取るに足らぬ官吏の意。「扣角歌」は『淮南子』『道応訓』に由来し、衛の寧威が、牛角を叩いて詠ったところ、斉の桓公に認められて大夫となつた故事。

「不佞已移居城南、待命上春而不得（不佞已に居を城南に移し、命を上春に待ちて得ず）」（「与萩休卿」『狭南集』卷四）

西内友美『「武野八景」考』（『成城人文研究』第一七号、二〇〇九年）

海量 享保十八年（二七三三）生、文化十四年（一八一七）没。八十五歳。字は宝器・奉張、号は寒巖窟。覚勝寺の住職。

陰山雍 寛延三年（二七五〇）生、文化五年（一八〇八）没。五十九歳。名は雍、字は文熙、通称は忠右衛門、号は豊洲・松桂園。河内狭山藩藩儒。

園。河内狭山藩藩儒。

「文化七年の建碑事業」（小平市史編さん委員会編『小平市史 近世編』小平市、二〇一二年）四九五頁

碑文は海岸寺の門前に現存する石碑に依る。参考資料として、小金井市史編さん委員会編『小金井市史 資料篇 小金井桜』（小金井市、二〇〇九年）に載る翻刻を参照した。

金井市、二〇〇九年）に載る翻刻を参照した。

『武鑑』寛政元年（二七八九）刊「織田豊前守」項参照。

『遺愛花』（文化八年（一八一二）序刊）に、「先生社中堤喜之、黛薫和」とある。

相見香雨「君台観刊本と豊田屋久右衛門」（『相見香雨集』四、青裳堂書店、一九九六年、初出一九三三年）

黛下蔭が三田に住んでいたことは、『類題和歌玉藻集』初編（文久三年（一八六三）刊）の末尾に附載される「玉藻集作者姓名録」の記事「下蔭 江戸三田 黛伝八」により明らかである。

丸山季夫「泊泊文藻の逸文——真淵二児山歌碑碑蔭——」（『金沢文庫研究』六卷二号、金沢文庫、一九六〇年二月）

石永貞については、前島康彦『「武野遊草」の著者について』（『武蔵野』六十四卷二号、武蔵野文化協会、一九八六年五月）に

詳しい。

『書画薈粹』初編（天保三年（一八三二）刊）および「当時現在 広益諸家人名録」（天保十三年刊）に上條游の記事が見える。

本文書は、川崎昌登家文書（府中市郷土の森博物館寄託）に含まれる。本稿では、国分寺市史編さん委員会編『国分寺市史料集

Ⅱ』（国分寺市、一九八二年）に載る翻刻を参照した。

田口弥三郎による『武蔵野狭山観音巡礼記』出版の経緯については、雪平庵其牛の撰した序文に詳述されている。所沢市史編集

委員編『所沢市史調査資料14』（所沢市史編さん室、一九七八年）六十六頁に載る翻刻を参照した。

「呈大僧正縁山堂公序」（『狭南集』卷三）「堂公初自縁山学龔甲座、出主深川靈巖寺也。忠休時寓山側、与会下学徒、日往還審之

（堂公初め縁山学龔の甲座より、出でて深川靈巖寺の主たるなり。忠休時に山側に寓し、会下（筆者注：浄土宗において、師僧

のもとで修行する場所）の学徒と、日び往還して之を審らかにす）」

山口剛「断碑断章」（『山口剛著作集』第六卷（中央公論社、一九七二年、初出一九二四年）

山口剛「断碑断章」（『山口剛著作集』第六卷（中央公論社、一九七二年、初出一九二四年）

榎寺の石碑および宇高良哲編『江戸浄土宗寺院寺誌史料集成』（大東出版社、一九七九年）に載る翻刻を参照した。

小金井の桜が植えられた時期については諸説が伝わる。『小金井桜拾遺』小金井市文化財ブックレット3（小金井市教育委員会生涯学習課文化財係、二〇二五年）では、川崎平右衛門の子孫に伝わる文書の分析から、元文四年（一七三九）から寛延二年（一七四九）の間と推定している。

土屋忍「大久保狭南 郷土の桜 桃源郷に重ね」読売新聞 武蔵野版・多摩版、二〇二四年一月十五日、二十六頁

土屋忍「大久保狭南「小金井桜樹碑」桜の解毒効用に注目」読売新聞 武蔵野版・多摩版、二〇二四年三月十四日、二十八頁

この表現は、『春秋左氏伝』『隱公三年』の文章をふまえている。「苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩蘊藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公（苟くも明信有らば、澗谿沼沚の毛、蘋蘩蘊藻の菜、筐筥錡釜の器、潢汙行潦の水、鬼神に薦む可く、王公に羞む可し）」この文章の意味する所は、明らかな信があるならば、水草や取るに足らない野草でも、粗末な器でも、溜まり水でも、神々に供えることができるし、王公にも勧めることができる、というものである。小金井桜樹碑における水質を誇る文脈にはそぐわないが、表現のみを利用したのだろう。

付記

本稿をなすにあたり、多くのご指導とご助言を賜りました真島望先生に心より御礼申し上げます。

また、貴重な資料の閲覧をお許しくださいました、小金井市文化財センター、三康図書館、早稲田大学図書館に篤く御礼申し上げます。